

人間科学部人間科学科人間社会コース 卒業研究発表会 開催報告

人間科学部 人間科学科3年 叶 富

1. 概要

日時…2015年1月30日(金) 13:00～19:00
場所…神奈川県横浜キャンパス17号館215教室

2. 講評

2015年1月30日(金)、2015年度人間科学部人間科学科人間社会コースの卒業研究発表会が17号館215教室で開催された。笠間千浪コース主任の挨拶の後、各ゼミからの発表者がそれぞれの卒業論文について口頭発表を行った。一部の発表題目のキーワードを挙げると、「買物難民」、「アナ雪」、「戦後沖縄史」、「大学生の喫煙事情」など多様であり、それぞれが学生生活を通して社会に対し常にアンテナを立て続けていたことを感じる。いずれの発表も、そうした自由な関心に基づき、フィールドワークやアンケート調査などを通して練り上げられた力作であった。しかし、発表内容もさることながら、全体を通して印象的

であったのは発表後の質疑応答である。4年生同士だけでなく、後輩からも率直な質問やコメントが飛び交い、時間が足りなくなるほどの熱気であった。発表者のみならず、これから卒論を書くこうとしている学部3年生にとってもこの上なく実り多い場であっただろう。

(人間科学部特任助教 横山貴史)

3. 優秀論文賞(研究概要)

◆菊地優里 「『アナと雪の女王』と現代社会」

世界各国で人気の高い映画シリーズの一つに、ディズニーが制作する「ディズニー・プリンセス」がある。このシリーズでは、プリンセスが登場して「愛」がテーマとして扱われることが多いが、その描かれ方には社会や価値観と共に変化が見られる。この変化を辿り、最新作『アナと雪の女王』

を読み解くことで、現代社会を捉えてみる。

1960年までに公開された初期のプリンセス作品(『白雪姫』など)には、プリンセスは受動的で、出逢ったばかりの王子と結婚する特徴がある。これは女性が家庭にいる存在で、日本ではお見合い結婚が主流だった社会が伺える。しかし1990年代のプリンセス作品(『リトルマーメイド』など)では、プリンセスは能動的になり、恋愛過程が描かれる変化が見られる。また、2010年の『塔の上のラプンツェル』では、プリンセスは自分の夢を叶えようとさらに行動的になり、恋愛過程も詳細に描かれた。この変化は、女性の社会進出が浸透してきたこと、そして恋愛結婚が主流になった社会が捉えられる。

この変化から3年後、2013年の『アナと雪の女王』では、二人のプリンセスが登場する。制作者によると、それぞれ「恐怖」と「愛」を象徴するという。そしてこの作品の「愛」は、自分以上



に相手进行思いやる気持ちで、それは「恐怖」をも溶かせるものだった。

これにより、人種のもつてが現実化してきたアメリカ社会を捉えられるのではないのか。異人種間カッパルにとって、異人種間結婚がマイノリティな時代の社会は「恐怖」であつただろう。しかし、異人種間結婚が増え人種のもつてが現実化した現代に、その「恐怖」は「愛」で溶けたのではないか

と考える。

このように「恐怖」を多様な生き方を認めない社会と考えると、日本では未だ溶けない「恐怖」がある。男女格差の改善が遅れている社会である。「能力を抑圧された女性が映画を見て、一時精神が解放される」という考察もあるように、日本の抑圧された現代社会が捉えられそうだ。

男女格差だけでなく、あらゆる理由で社会の在り方に抑圧された人々が多くいるであろう「恐怖」の現代社会で、生き方の多様性と選択の自由が認められるような「愛」ある社会になるよう考えていきたい。

◆萱森弘貴 「スクールカーストの存在をいかに受け止めることができるか…退出という第3の選択肢」

本論文では、スクールカーストの存在をいかに受け止めることができるか、その可能性を探ることを目的とした。スクールカーストに対して従順、抵抗、退出という3つの受け止め方を想定し、特に第3の選択肢として「退出」が持つ意味と可能性を明らかにした。

従順と抵抗の観点から先行研究を分析し、それらをスクールカーストの問題に捉え直し、「退出」の意味と可能性を考察した。本論文で用いる「退出」



とはスクールカーストの上位でも下位でもなく、その外側での目的を持った生活に価値を見出すことを意味する（筆者による定義）。そのためにまず、森口朗をはじめとする先行研究をもとに、スクールカーストの現状について分析した。「従順」という選択肢を取らざるを得ないケースが多い理由と、その仕組みを明らかにした。

次いで、階級化社会イギリスにおける反学校文



化（労働者階級文化）の研究史『ハマータウンの野郎ども』を分析した。イギリスと日本の時代背景や文化的な違いを踏まえ、反学校文化の問題をスクールカーストにおける「抵抗」と捉え直すことで、「抵抗」の意味とその制約について明らかにした。

最後に、「退出」の意味とその可能性を考察した。退出の具体例として、学級に参加しない「不登校」

や学校側が異なる枠組みを設ける「特別支援学級」を挙げた。これら「退出」の可能性は、スクールカーストに関わる2つの支配（1つ目は人間関係が権力に支配されること、2つ目は価値基準が能力と成績の評価に支配されること）から距離を置く点にあると仮定し、論証した。上記の2つの支配は、スクールカーストに限定したものではなく、学校教育が抱える制度的な課題であり、今日的な課題と深く結びついた問題であると考えられる。以上のことから、スクールカーストの存在を「退出」という立場から受け止めることで、「権力に支配された人間関係」と「能力と成績の評価に支配された価値基準」から距離を置くことができると結論した。

◆内田章太 「戦後沖縄史と県民生活」

私が沖縄に興味を持ったのは小学校6年生の総合学習「沖縄」でした。高校の授業で「基地問題研究」という選択授業を履修し、沖縄でのフィールドワーク調査も行いました。大学では沖縄県の伝統芸能エイサーの学生団体を運営しました。沖縄で実際に感じたことや聞いた話も交えて論じていきます。

1945年6月23日に沖縄戦が終結し、1952年4月28日にサンフランシスコ講和条約

が締結され、沖縄県はアメリカの統治下におかれることになりました。「拳銃とブルトーザー」に例えられるアメリカによる基地拡張工事は沖縄の人々の生活を大きく変えることになりました。土地接収と空爆による焼失で第一次産業が急激に減少し、基地経済の第三次産業の島になっていきました。戦後、基地依存度は75%を超え、アメリカ軍による新基地建設が一段落する1960年代以降は50%を切り、本土復帰を果たす1970年代には15%の水準にまで減少した。しかし、アメリカ軍の統治下である間に伸び続けた第三次産業への異常な偏りが改善されることはなく、日本政府による第二次産業、特に製造業の誘致や立地政策も不発に終わったため、沖縄の経済は90%が第三次産業に依存することになった。沖縄の経済は基地、公共事業、観光の頭文字をとった「3K依存経済」と言われるようになった。

本土復帰後も多くの基地問題を抱える中で、失業率や物価の低さなども深刻化している。その反面、本土進学や就職をする若者達は、当初から沖縄へ戻る予定で本土へ渡り、30歳までに戻ってくるUターン現象が見られる。これは本土での生活の問題ではなく、ほとんどが沖縄に対する愛着から生まれる現象であった。沖縄の自然の多さや年齢層を問わない伝統文化を守る意識が、他の

都道府県と沖縄県の違いを生み出し、愛着形成に繋がっている。しかし、沖縄の学校で「琉球史」などの授業が行われるわけではない。この愛着の形成は人間同士の温かいつながりや、異文化も受け入れる沖縄ならではのものではなかった。

◆水嶋優稀 「千葉市美浜区磯辺における食料品店へのアクセス環境」

近年高齢者を中心に、食料品店で買い物すること（食料品店へのアクセス）が困難になっている人が増えている。その要因は、食料品店が自宅近くにない（空間的要因）だけではなく、貧困のために食料を購入できない、孤立して買い物を手伝ってくれる人がいないなど（社会的要因）も含まれる。しかし自らの足で食料品店へ行くことは、健康増進に大きく貢献する。したがって本研究では、空間的要因から、食料品店へのアクセスの実態について明らかにすることを目的とする。そのために、住宅から食料品店までの距離と、ルートの段差や幅などの道路状況を調査した（この2つをまとめて食料品店へのアクセス環境と呼ぶ）。そして食料品店へのアクセスに最も苦労していると考えられる高齢者がどこに住んでいるか推測することで、アクセス困難に陥っている人がどこにいるか分析した。調査対象は、第二次世界大戦後

に住宅地化され、近年高齢化率が上昇している千葉市美浜区の中で、最も高齢化率の高い磯辺地区とした。

調査の結果、磯辺地区は食料品店へのアクセス環境が良いとは言えないことが分かった。これは食料品店が地区内になく、隣の地区まで行かなければならないといった距離上の問題もある。しか



し食料品店までの距離だけで見れば特に問題のない地域であっても、食料品店までの歩道の幅が狭いなど、ルート状況が悪いため、アクセスに苦労している可能性がある。また高齢者の居住者数は食料品店までの距離が遠い地域に多いが、ひとり暮らし高齢者は食料品店までの距離が近い検見川浜駅周辺に多いことが分かった。したがってアクセス困難に陥る人は、食料品店までの距離が遠い地域よりも、距離の近い駅周辺の方が、多い可能性が指摘できる。

本研究では、ルート状況も明らかにしたという点では、空間的要因からの調査における新たな試みになったと言えるだろう。しかしルート内のどの箇所が特に悪いかまでは明らかにできなかった。また社会的要因や、高齢者以外の人たちを対象とした分析も行っていない。これらは今後の調査の課題としたい。

◆川田愛里菜 「テーマパークにおける非日常的な空間の形成」

本研究はテーマパークが少子高齢化やレジャーの多様化により頭打ち傾向にあるという状況をふまえ、テーマパークにおける非現実的な空間の作り方を解明することを目的とする。そのために、大成功をおさめたユニバーサル・スタジオ・ジャパ



ンの新エリアである、ウィザーディング・ワールド・オブ・ハリー・ポッターを調査対象にした。エリアの外側から内側と内側から外側の見え方、本物よりも本物らしく見えるよう工夫するスケール感、エリア内がストーリー性を持っているかどうか、デイテールという細かいデザインが施されているか、以上の4つを調査項目とし、現地調査を

行った。

調査の結果、ウィザーディング・ワールド・オブ・ハリー・ポッターでは、乗り物のアトラクションだけでなく、景観や商品にもスポットをあて、非現実的な空間をつくりあげていることが明らかとなった。現実では違和感を感じる建造物のデザインや、冬景色から春景色に変わるなどの景色の移り変わり、味わったことのない食べ物などを提供することで非現実的な空間を演出していたと考えられる。しかし、施設の配置においては、乗り物アトラクションが密集してしまっている。今は、乗り物以外にも人気があるため密集する危険性はないが、食べ物においては、口に合わないという意見もあるため、一時的な人気で終わる可能性も考えられる。だが、この斬新な味が人気を呼んだとも言える。そのため、今後も魔法の世界だからこそ斬新なアイデアの商品を乗り物アトラクション以外の場所に次々と取り入れ、設置することで、人気の継続につながり、安全な空間をつくることができるだろう。

◆藤村隼次 「都市部における多自然川作りの効果」

1990年に国土交通省より多自然型川づくりが導入され、従来の治水機能のみの川づくりから

環境機能も重点に加えた川づくりが行われるようになり、全国の河川がそれに基づく河川整備が行われるようになってきたという状況をふまえ、本研究は、人口が多く治水機能も重要である都市部においてどのように環境機能が組み込まれた多自然川づくりに取り組み、人間と自然が都市部でどのように共存しているのかを明らかにすることを目的とする。そのために都市部であり、なおかつ山村を持つ横浜市を対象に河川の実地調査を行った。

調査の結果、都市部においては環境機能と治水機能のバランスが重要であり、多自然川づくりの維持には地域住民の協力が不可欠であることが明らかとなった。流量の多い河口部や、河川と住宅施設や工場施設が隣接しているような場所で環境機能を重視した川づくりを行ってしまうと、堤防の決壊や洪水による被害を食い止めることが難しく、増水した河川をいち早く海に流すためにはどうしても治水機能に重点を置く必要がある。反対に上流部や源流域においては、河川の流量が少なく、流路も自然の状態の形状に近いまま川づくりをしても、災害時に大きな被害は出にくく、ところどころに増水時の遊水池を設置することで十分な防災となる。治水機能を重視した川づくりを行ったとしても、階段護岸や高水敷、親水拠点

などの河川と人が触れ合える空間である親水施設を設置することが可能である。もちろん治水機能が重視されているところでは進入禁止である空間が多いなどの制限がかかるが、地域と河川の交流の場としての機能はしっかりと果たせる。河川および河川周辺に時折漂流物や廃棄物などのゴミが目につくことがあるが、これも地域住民が愛護会などの団体を作り清掃ボランティア活動を行うといったことで解決することができる。

実際にそのように活動している地域も多い。しかし、河川全域を網羅できるわけではないため、活動の限界もある。そのため、住民の活動がより広域になるような働きかけや、制度やサポートが今後必要になってくるだろう。

◆大山奈希沙 「ロンドン観光ガイドブックから見る日本人の観光行動の特徴について」

本研究は、海外への自由旅行をする日本人が増えていることを踏まえ、英語圏の観光ガイドブックと日本の観光ガイドブックを比較することで日本人の観光行動の特徴を明らかにすることを目的とした。そこでロンドンを対象としている日本語で書かれた観光ガイドブックと、英語で書かれた観光ガイドブックを利用し、それらに記載されているアトラクションについて比較した。それぞれ

の観光ガイドブックで取り上げられているアトラクションを抽出、分類し、分析を行った。次にこれらのアトラクションの分布について分析した。更にこれらの分析から得られた結果を裏付けるため、フィールドワークを行った。

調査の結果、日本人は①夜間観光を行わずにサービスの質の高い宿泊施設を利用する、②商業施設を多く利用する傾向がある、③地元の人が利用する場所や、「王室」や「貴族」を連想させるアトラクションを主に観光していることがわかった。

①の理由として、日本人は不慣れた海外で出る限り安全に観光を楽しむためにサービスの質が高く安全が保障される高級ホテルに宿泊し、危険を伴う夜間の行動は控えると考えられる。

②は、商業施設の主な利用目的として、自身へのお土産と言うより友人や所属する集団に配るためだと考えられ、大量に購入できる商業施設を観光すると考えられる。

③の理由としては、ロンドンでよく食べられている物を食すことでロンドンらしさを感じ、一方で普段は通わない一流の飲食店や、伝統的な建物、高級品を扱う商業施設にメディアで見える「王室」などのロンドンらしさを感じていると考えられる。

今後は観光ガイドブックの中でもどのアトラク

ションに人々が集まる傾向があるのかを調査する必要がある。また、ほかの都市についても同様の結果が現れるか、都市でない地域を扱っているガイドブックでも似た傾向が現れるかなどの調査を行うことで、さらに日本人の海外観光の特徴を明らかにすることができる。

以上

